



冬の子供たち / Winter Children (1974) / マクル・コニイ (関口幸訳) / サンリオ (文庫 12/5 刊・¥440)

三種三様のコニイが、本書までで翻訳されたことになる。本格SFとしての『プロントメク!』、ジュヴナイルのイメージを備えた『ハロー・サマー、グッドバイ』、そして、イギリスSF伝統の破滅(後)物が、『冬の子供たち』だ。

いつごろの時代か、永遠の冬に閉じ込められた世界に、小さなグループが生活している。尖塔だけが、雪野原に突き出した住処。肉の狩り手と呼ばれる盗族や、四つ肢の脅威と戦いながら、彼らは生活するが、そのうち食糧が不足し、南を指して旅立とうとする……。

破滅物といって、すぐに浮かんでくるのは、ウィンダムやクリストファーあたりの、イギリス系作家だろう。アメリカにもあることはあるが、今ひとつ系統的な流れには、至っていないように思う。イギリスの作品の多くでは、破滅に臨む過程自体が、主眼になることはない。その後の世界の、秩序回復も、さほど重要視されない。——小集団がいかに生きていくか、あるいは、いかに生きたかが、結局、問題となるのだ。本書にも、そんな特色が出ている。登場人物の個性、適度な冒険などもあり、充分楽しめる内容だろう。(俊)